

「真の宗教」と「新文明」

—英文論説による内村鑑三のキリスト教—

イザヤ二・一〇五、ローマ三・二一

二六、讚美歌四二〇

まえおき

本日は再度この伝統ある内村鑑三記念講演会にお招きいただき、甚だ光栄に、また有難く存じております。前回は九一年四月で湾岸戦争勃発後三か月程の日、今回は昨年九月十一日の米国同時多発テロ事件から明日でちょうど半年になります。この十年の間に、皆様はあの大震災に遭遇されたのですが、日本も世界も幾度か激震に揺さぶられました。

前回私は、自分が英語教師をしていたこともあって、「英語から見た内村鑑三」と題し、内村の英語との関係、彼の英語観、そしてその英語で綴られた論説に表明された彼の思想と信仰について少しくお話し致しました。今はその職を退きましたが、今回も「英語から見た内村鑑三、その二」として、副題に掲げたように「英文論説による内村鑑三のキリスト教」についてお話しすることに致します。

今回の講演会には数本さんからご親切なお招きをいただき、皆様の主に在るご厚情に感

激して、お断りする理由もないままにお引受けしたのですが、どんな話をしたらよいか迷っているうちに、あのテロ事件が起こり、その直ぐ後に数本さんから演題を知らせるようにというご連絡をいただきました。あれこれ思い感った末に、ご返事申しあげたのがこの題なのですが、話の「まえおき」にその理由を少々申し述べます。

あのテロ事件から半年が過ぎて、テロの現場は一応片付けがすんだと言いますが、まだ二千人の人が行方不明であるという。アフガニスタンでは新政権が発足し復興が始まったと言いますが、戦争はむしろ激化しています。こうした現況が示しているように、あの事件の提起した問題は何一つ解決したわけではなく、その意味が解明されたわけでもありません。ただあの事件が、「あの日を境に世界は変わった」と言われる程の大事件であったことは否み得ない事実であろうと思います。

これは文明の衝突であり、宗教戦争だという人があります。いやそうではない、そうしてはならないと論じる人もあります。いずれにしても、自爆テロと巨大建造物が象徴しているように、この事件の中心問題が宗教であり、文明であることは確かです。キリスト者である私どもにとつては、端的に信仰と平和の問題であると言つて間違いないでしょう。ですからキリスト者の間に、もっとイスラム

教を理解するよう努めるべきであるとか、我々はテロにも戦争にも反対であるという声が挙がったのは当然ですが、私が些か疑問に思うのは、私どもの間に、キリスト教そのものを問う問い、即ち私どものキリスト教はこれでよいのか、私どもの信仰に間違いはないのか、という問いは必ずしも多くないということとです。

きょう私どもが記念する内村鑑三は、絶えずキリスト教そのものを問い続けた人でした。彼は若き日札幌で「いかなるキリスト教が人類を救うに足るか」という問題に心を捕われたと言います。五十歳の頃友人宮部金吾に宛てた手紙の中では、「キリスト教とは何ぞや、それは信ずるの価値ありや（英文で）。これが矢張最大問題に御座候」と書き送っています。（私はこの言葉で内村に開眼しました。）そして生涯この最大問題と格闘したのでした。彼が自分のキリスト教を、「十字架教」「日本的キリスト教」「独立的キリスト教」「無教会主義のキリスト教」などと呼んだのは、すべてその結実であります。

ところで、つい先日私は東京の「クリスチヤン・アカデミー」の「諸宗教との対話」勉強会で、若い神道学者による「国学者の神理解」という講義を聞き、益されるところ大でした。彼が言うには、神道信仰の基本的性格は多神教で、人を「神の生みの子」と認識す

る神道の世界は非常に豊かなものだとのことでした。そして、私どもとの対話の中で彼は私どもにこう質問しました。「絶対、超越、全能の神を同根とするユダヤ教、キリスト教、イスラム教が、なぜこれ程に争うのか」と。そもそも宗教は平和をつくり出せるのか。むしろ宗教こそが戦争の元凶ではないのか。宗教者一般に問われているこの問もまた、キリストの平和に生きる私どもが深刻に受け取らざるを得ない喫緊の問題であります。

このような疑問に答える為にも、内村の言うところに聞いてみたいと思うのが、きょうの話です。

『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』について

その前に、ここに表題として掲げた「真の宗教」と「新文明」という内村の文章の出所である、『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』という雑誌について少々申し上げておきます。今回は英文論説と言ってもこの雑誌に掲載されたものに限ったことであることをご諒承下さい。

これは一九二六年三月創刊、二八年二月に二四号をもって廃刊になった、内村にとって三番目の雑誌です。内村が六六歳から六八歳

で、回心後四十年、『聖書之研究』誌の発行が四半世紀三百号に及び、午前・午後二回に分けて行われた日曜日の聖書研究会は常に盛會、内外ともに最も充実していた時でした。本誌の廃刊後二年で病没したことを考えますと、これは内村が自ら為した彼の思想、信仰の総括と言えましょう。実際面でも、彼のこの時期中国やアフリカにおける医療伝道へ積極的支援をしていて、その人生の実りの秋であつたことを示しています。

雑誌発行の目的は、創刊一と月前の日記にこう書いています。「キリストの十字架の福音が今やいわゆるキリスト教国に絶えんとするにあたりて、自分はただ安閑として傍観することはできない。ここに全力を注ぎ、わが生涯の最後の努力として、かねて学び置きし英文をもって、日本にありて全世界に向かつて、簡単にして深遠なる神の子の福音を伝えんと欲する。」そして創刊号の「主筆の自己紹介」では、自分を「日本人、サムライの子、独立のキリスト者。職業は著述、雑誌の編集、キリスト教の聖書の教師である。……わたしは平和主義者である。戦争を憎む者である。わたしは比較的政治には興味をもたない。しかし神と世界と靈魂を愛する者である」と言っています。

その頃の時代背景を語るものとして一つだ

け申し添えますと、創刊号が出来上つた日の前日の内村の日記にこうあります。「労働露国は人類の歴史における未曾有の冒険的大試験である。たぶん遠からずして大失敗として終わるであろう（ソ連崩壊の予言！武藤）。しかし一度はやって見る価値はある試験である。共産党の誠意に対しては尊敬を払わざるを得ない」（二六・三・二二）。この二年後、本誌廃刊直後、共産党員の一斉検挙いわゆる三・一五事件が起こり、内村は四百余名に上る青少年たちの起訴を聞いて「実に悲しいことである」と日記（二八・五・二二）に書いています。

自ら主筆として健筆を揮つたこの時、内村の英文は円熟の域に達し、英語ならではの率直さとユーモアとが豊かに看取されます。「ユーモアのない人たち（ユーモアレス・ピープル）」というユーモアフルな一篇もあります。

なお『インテリジェンサー』は『内村鑑三英文論説翻訳篇』下巻（道家弘一郎訳、岩波書店、八五）に収録されていますが、石原兵永訳の『英文雑誌による内村鑑三の思想と信仰』（新地書房、八三）もあります。きょうはすべて道家訳を用いることに致します。

宗教（信仰）の問題

これはお読みになった方もあるかと思いますが、最近『甘えの構造』の土居健郎氏が「内村についての短い評論の中でこう書いておられました。（『文芸春秋』二月号）「私が特に注目するのは、彼がかなり早い時期、恐らく米国留学中にすでに、キリスト教とそれを日本に伝えた西洋をはっきり区別するに至ったことである。私は彼こそキリスト教と西洋を分けて考えることができた最初の日本人ではなかったかと考える。」これは彼に対する正当な評価でありまして、内村という人は信仰と文化の問題をよく知っていた。すなわち信仰と文化は深く関わり合いつつも全く別のものであること、むしろ決定的に対峙対立するもの、しかも信仰は常に文化を生み出してやまないものであることを、驚く程早くから自覚していたのです。だからこそ、彼は生涯キリスト教そのものを問い続けたのでした。さて、ここで本論に入ることになります。

前半は宗教の問題ですが、この部分を代表する論文として「真の宗教」（二七・一二）という短い詩を選びました。これは「キリスト教とは何ぞや」を探究する内村の霊的遍歴の行き着いたところ、彼の思想の凝縮、彼の信仰の頂点をなすものと言って宜しいと思います。短いので全文を読みます。

それは考えることではない。働くことではない。それは信じて、ただ信じている。信仰は人をして正しく考えさせ、義しく働かせる。

「神がつかわされた者を信じて、神のわざである」（ヨハネ伝六章二九節）と、主なる救い主は言われた。まことに然り、まことに然り。

広告も無用、煽動も無用、「運動」また「活動」も無用――

人々の同情を獲得することも無用である。信仰、忠実な息子がその父を信頼するような信仰――

これこそが最高の知恵であり、宇宙を動かす力である。

真の宗教ほど単純なものはない。そのためには神学も宗教教育も無用である。

修道院も自己犠牲も必要ではない。そのために天と地とを探す必要はない。

「言葉はあなたの近くにあり、あなたの口にある、心にある。これすなわち信仰の言葉である」と兄弟パウロは言った（ロマ書一〇章八節）。

宇宙は、信仰の呼びかけに応えうるよう造られているように見える。

信仰―それは神秘主義ではない、それは醒めた意志的な行為である――

宇宙の父なる造り主に全自我をあますところなく引き渡すこと、まったく受動的になり、それゆえ驚くほど能動的にさせられる行為である。

内村の言う真の宗教はここに尽きているのですが、もう少し具体的にそれがどういう信仰であるのかを、他の論文に即して三つの点から考えてみたいと思います。

第一にそれは「無教会主義のキリスト教」です。ここで取りあげる論文は「霊と形」

（二七・一）ですが、この論文は「わたしは霊を重んじ、形を重んじない」という宣言のような強い言葉で始まり、人はいかに形、とくに美しい形にとらわれるかを述べ、宗教においてさえ形は不可欠なもので、西欧のキリスト教徒にとっては形のないキリスト教などというものは考えられないかも知れない。しかし「不思議なことに聖書のキリスト教は本質的に霊的であり、ほんの少し形式的であるにすぎない。神は霊であるから、霊を通してのみ知られる。即ち形なく儀式なく教義なく組織された教会なくして、霊と真とをもって拝することができ、拝されなければならぬ」と論じ、自分が四十年間伝えてきたキリスト教について、こう言います。「よりよい名

称がないので、わたしはこの形なきキリスト教の形を『無教会主義のキリスト教』と呼ぶ。しかし実質には名称以上のものがある。それは否定的な信仰ではない。積極的な信仰である。」(傍点＝武藤)この言い様には内村の謙虚と自負とユーモアが巧まらずして表出されていると思います。

ここで内村の言う無教会主義は、「人の救われるはその行為によらず信仰によるとの信仰の帰結として唱えた」(「遺稿」三一・三)という無教会主義とは些か異なるニュアンスで、宗教の性質に関わる一つの原理(前述)を表明したものと云って宜しいでしょう。そして彼はこの形なき形、すなわち靈性は、「非現実性に陥る危険性はあるかも知れないが、その本質において、あらゆる存在のなかで最も確実なものであり、健全な思考と有効な行為の基礎として十分に頼ることのできるものである」と言い切っています。

第二に、私はここで彼が言う「積極的な信仰」を「日本的キリスト教」と理解したいと思います。この表題をもつ重要な一篇もありますが(「ひとりの日本人が真に独立にキリストを信じるとき、彼は日本的クリスチャンであり、彼のキリスト教は日本的キリスト教である」二六・五)、割愛して、ここではや

はり「二つのJ」(二六・五)を読もうと思います。

わたしは二つのJを愛する、その他を愛さない。一つはイエス(Jesus)、一つは日本(Japan)である。

わたしは、イエスと日本の、どちらをより愛するか知らない。

飢えよ、来たれ。死よ、来たれ。わたしはイエスと日本を手離すことはできない。わたしは断固としてひとりの日本人キリスト者である。

イエスと日本、わたしの信仰は一つの中心をもつ円ではない、それは二つの中心をもつ楕円である。わたしの心情と知性は、この二つの親しい名前のまわりを回転する。そして一方が他方を強めることを知る。イエスは、日本に対するわたしの愛を強め清める。日本は、イエスに対するわたしの愛を明確にし目標を与える。この両者がなかったならば、わたしは単なる夢想家となり、狂信者となり、漠然たる一般人となったことであろう。イエスはわたしを世界人とし、人類の友とする。日本はわたしを愛国者とし、それを通して固くわたしを地球に結びつける。わたしはこの両者を同時に愛することによって、狭

くなりすぎることもなく、広くなりすぎることもないのである。

誤ったナショナリズムが声高に唱えられる時代ですから、私どもも誤解されやすい内村の文章をよく注意して読まなければなりません。私が、きょう私は特に「わたしの信仰は二つの中心をもつ楕円である」という言葉に注目したいと思います。彼は自分の信ずるキリスト教に「もし哲学的基礎があるとすれば、それは二元論である」と言い、その信仰的意義を「楕円の真理」と呼んでいます。最晩年には「楕円形の話」(三〇・一)という貴重な一篇をもつてこしています。これを内村の「複眼的思考法」と評する人(鈴木範久氏)もありますが、私は「二元論における相対化の視座」と呼びたいと思います。楕円の真理においては、一つの中心は他の中心を互いに相対化する作用をいたします。真理は独占されることを許さず、必ず分有されるものだからです。

イエスと日本を同時に愛するとき、イエスという一つの中心は、もう一つの中心である日本を相対化し、その偏狭な独善的愛国心を打破し、その自己完結的な文化を開放いたします。内村の愛国心はそのようなものでした。

と同時に、これは異様な言い方かも知れませんが、日本はイエスを相対化するのです。彼が「二つのJ」の一年程後の日記（二七・九）に次のように書いているのを読んで、一層その感を深くするものです。「日本とは日本政府でもなければ日本人全体でもない。日本というあるMysterious Personality（神秘的な人格）である。これを愛し、これに仕えて、われは無上の幸福を感じるのである」。私の話の文脈で言えば、文化・文明は宗教を相対化するということです。

要するに、楳円の真理の示すところは、この世に絶対はないということです。

以上申し述べたところを合わせて、「形なき形としての日本的キリスト教」と言うべき顕著な性質をもつ内村のキリスト教は、しかし伝統的なキリスト教、正統的な福音信仰と何ら変るところはありません。ただ彼はその信仰を信仰箇条としてでなく、どこまでも自分の人生の体験から会得したのです。それは、その表題からしていかにも個人的、証言的な「わたしはキリストをどう思うか」（二七・二）という、この雑誌の中では比較的長い一篇の中の、彼の「罪」についての告白的説明を読めばよくわかります。

彼はそこで日本語訳でも一千字を費して、罪の実在とその本質、罪の不可解性を、英語ならではの客観性と精緻さをもって、凡そ考

え得る最も深刻な議論を展開しています。そして、自分はキリストを完全な人間であり、かつ「神なる救い主」であると考えるとし、「どういう説明がなされるにせよ、わたしは、罪の、わたしの問題の実際的な解決を、神の子の贖罪の死のなかに見出した」と告白し、これを「回心の奇跡」と呼んでいます。さらに「回心は決して一つの宗教から他の宗教への変更ではなく、靈魂の新たな創造である」と主張しています。

これはすぐおわかりのように、ローマ書三章二一〜二六節の「神の義—キリストの十字架の贖罪—信仰による義」というパウロの信仰義認論と、全く軌を一にするものであり、キリストの福音の真髄であります。きょう私 が特に注意したい点は、パウロが信仰義認は何よりも「神が正しい方であることを明らかにするため」と言っていることです。神は神ご自身の義のために、信じる者を義とされるということです。

こんにちキリスト教はしばしば「愛」の宗教として知られていますが、もし内村に習って、この危機の時代に「いかなるキリスト教が人類を救うに足るか」と問うならば、それは「義」の宗教であると答えねばならないと信じます。これが私の挙げる第三の点です。内村は、「ロマ書講義」の中でもこの真理を諄々と説いています。英文でもこのパウロの信仰に相応じるかのような一篇を残してい

ますので、読むことにします。

「愛」と「義」 （二六・八）

神は愛である。このことは神が慈悲であることを意味しない。慈悲は確かに愛の一部ではあるが、愛と慈悲を同一視することは非常に大きな間違いである。

愛は慈悲以上である。愛はそのなかに義を含む。じっさい愛は他の何物よりも義に似ている。

神が愛であるというとき、ほとんど神が義であるというに等しい。

偉大なるものは義である。その実際に現われたものが正義である。正義が維持されているかぎり国家も個人もすべては健全であるが、正義が無視されるときすべては病み混乱となる。不義の雰囲気の間には慈悲は存在しない。「単純な愛」がどれほどあっても、単純な正義にとつて代わることはできない。そして神がわれわれに対して義でありたもうとき、われわれを最も愛したもうのである。彼は義を抜きにしてわれわれを救わず、義にありて救いたもう。罪の赦しとは神が単にわたしの過去の罪を忘れたもうということではない。神が正義をもって罪人としてのわたしを扱いたもうことをわたしは承認することを意味する。わたしがこれを認めると彼は慈悲ぶかくもわたしを赦す。

神は「正しいから罪をゆるす」。この深い単純な真理を理解することができずに、「愛、愛、ただ愛のみ」というキリスト教は、断じてキリスト教ではない。

以上申し述べてきたような内村のキリスト教から、私どもは今何を聞くべきでしょうか。個人的なことを申して恐縮ですが、私は自分のささやかな軍隊体験から、常々日本人の擬似精神主義に多大の疑念と批判とを持っていきます。戦争中それは特攻精神とか玉碎主義に表出しましたが、今もなお勝利至上主義や「ガンバリズム」などに強固に残っていて、日本人の精神性を蝕んでいます。今回のテロリストと言われる人たちの心情にも、それに通じるものがあると思うと、やりきれない思いがするのですが、今回の場合は、自分が死ぬだけでなく、何の関係もない多くの人たちを道連れにしたというのですから、これは許さるべくもない卑劣な行為です。そればかりでなく、人間も文明も否定しざる実には悲しむべき事件であって、現代の虚無的精神状況もここに極まった感じがいたします。

その意味では、ブッシュ米国大統領の「テロと文明は共存できない」という言葉は正しいと思います。しかし、文明イコール西洋

中心主義か、欧米流の近代化か、あるいは文明とはキリスト教文明のことかと言えば、決してそうではありません。今度のテロは正にそのことを世界に訴えたものでした。そうであれば、テロを生み出す土壌やその背景に対する何らの顧慮も反省もなく、「これは戦争だ」と叫んで軍事報復に走り、テロと同様全く無関係な、もっと多くの人々を捲き込んで、テロ以上の残酷な戦争をするなどということは、超大国の傲りも甚だしく、文明の名が泣く暴挙だと言わなければなりません。

これは湾岸戦争の時と同じ構図ですが、一方が「アラブ・アクバル」と言えば、もう一方が「ゴッド・ブレス・アメリカ」と言う。「軍」と言う。いずれの側も「正義」を主張し、相手を「悪」とのしる。そして民衆が、それぞれ「大義」を熱狂的に支持する。これは明らかに宗教戦争ではありませんか。もしこの言葉遣いが正しいとすれば、これはイスラム原理主義対キリスト教原理主義の戦いですが、因に、聖書には確かに聖戦の思想がありますが、それは「復讐するは我に在り」と言う万軍の神自らの戦いであって、決して「天に代りて不義を撃つ」類いの人間の戦争ではありません。

このような戦争に人間を駆りたてる宗教と

は、何と恐しいものでしょうか。内村が二つのJを愛すると言った時、彼は文明のみならず宗教をも相対化しました。この相対化の視座がないとき、人は自らを絶対化し、自分が絶対者になってしまふ。そこに宗教的熱狂が生まれ、人は宗教的陶醉の中に人格を喪失してしまふのです。「醒めた意志的な行為」の主体ではなく、醜悪な「自己犠牲」をもちとわれない鬼と化してしまふのです。世に熱狂と陶醉のカルトや擬似宗教がはびこるゆえんです。

では宗教戦争にしない為にはどうすべきでしょうか。諸宗教が対話を通して互いを理解し、寛容をもって共生を計るべきだと言われます。その通りだと思いますが、その実現の為にも、もっと根本的なことは、内村の言うように、一つの宗教から他の宗教に移る「回宗」ではなく、魂の再創造である「回心」こそが先ず求められるべきではないでしょうか。そして、形のことなどが問題にならないような宗教、形なき形の宗教、それ程に決定的な信仰に生きることを、共生の基盤となすべきではないでしょうか。争いは常に形のことについて起こるのですから。

その意味では、内村のキリスト教はいわゆる宗教ではありません（「キリスト教は宗教にあらず」（二九・二）、「無宗教無教会」（二九・四）参照）。徹底的に相対化された

宗教、世のいわゆる宗教から脱出した、宗教ならざる宗教を、彼は「真の宗教」と呼んだのでした。そして彼は、これは逆説的な言い方ですが、人は各自「絶対的宗教」（遺稿）に生きるべきであると主張したのです。多分これが「一神教」と呼ばれるべきものでありましょう。

文明（平和）の問題

話の後半、文明の問題に移ります。ここでとりあげる論文は「新文明」（二六・四）という一文です。

これを読む前に、非戦論者としての内村の歩みを一瞥しておきます。この論文は彼の非戦論の延長線上にあります。

近代日本は一九四五年の大崩壊に至るまで実に十年おきに戦争をしてきました。内村はその生涯の中で三つの戦争を体験しています。日清・日露の両戦争と第一次世界大戦です。彼がひとりの日本人キリスト者として、戦争と平和に深甚な関心を抱いたのも当然です。よく知られているように、日清戦争において内村は義戦論者でした。英文で「日清戦争の義」（一八九四・八）を綴り、日本の正義を世界に訴えたにもかかわらず、それは結局「欲戦として」終わりました。戦勝を誇る国

民に憤慨した彼は、十年後の日露戦争では、こんにち平和思想の古典的文章となっているあの「戦争廃止論」（〇三・六）をもって非戦論者として立ち上りました。

余は日露非開戦論者であるばかりでない、戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうして人を殺すことは大罪悪である。そうして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。世の正義と人道と国家とを愛する者よ、来たつて大胆にこの主義に賛成せよ。

この主義、即ち「絶対的非戦主義」です。

世に「義戦」ありという説は、今や平和の主を仰ぐキリスト信者の、口へのぼすべからざるものであります。私自身は今絶対的非戦論者であります。

平和は決して戦争をとおして来たりません。平和は戦争を廃して来たります。武器を擱くこと、これが平和の始まりであります。

さらにこう勧めています。

戦争は最大の悪事である。ゆえに他国の戦

争を廃するを待たずして、みずから進んでそれを廃すべきである。みずから剣を鞘に収めずして、他に兵器の放棄を要求するも、効果なきは明白である。戦争は相談の結果廃するあたわず、みずみずから独りこれを廃すべきである。

「戦争廃止・武力放棄」の内村の非戦論のいわば総括として、さらにその文明論として展開されたものが、これから読む「新文明」という一篇であります。

彼はまずこう論じます。ひとは完全な文明を得ようとして、東西両文明の融合について語るが、実は両文明ともに既に死に絶えたものである。従つて、もしわれわれが文明人・文明国として生きようとすれば、われわれ自身で古くて新しい文明を作り出さなければならぬ。それはいかなるものであるか。

内村はここで「ユダヤ人イザヤのヴィジョン」すなわち預言者イザヤのあの平和預言（イザヤ二・四、一一・六・九）がそれであると示します。そしてその説明に入る前に、自らは「永久に続くキリスト教文明を樹立したと思ひこんだ」西洋文明の誤りを、次のように厳しく批判しています。

しかしそれは、バベルの塔にほかならな

った。神はその支持者の間に混乱の靈をおくった。東洋のわれわれが驚いて見ている間に、巨大な建築は崩壊し、そのまま永遠の荒廃のうちに放置されているこれがふたたび起ち上がって人類を祝福することはないであろう。

(傍点Ⅱ武藤)

今回のテロ事件を予知しているような黙示的描写ではありませんか。

ではこの論文の後半、イザヤの預言について内村の言うところを聞きましょう。

このヴィジヨンは、戦争のない世界というヴィジョンであった。文明がもし何らかの意味をもつとすれば、文明とはこの戦争のない世界の状態でなければならぬ。艦隊と軍団に守られてのみ存在する文明などというものは異常そのものである。それは文明ではなく、純然たる野蛮である。強力な軍備に守られ、そのもとにおいてのみ存在してきた西洋文明は、そもそも文明であるはずはなかったのである。このような擬似文明が自己の本性である破壊性を見せつけたのであった。文明を守ると称した野獣が、かえって文明を貪り食い、今はその獣性を露出して君臨している。

「非現実的なまぼろしにすぎない」と、あなたも言おうだろう。しかし、あなたがた

のいう武装した文明というのは、現実的であったか。みずからその非現実性を証明したのではなかったか。むしろ、武装しない平和こそ、唯一可能な平和ではないのか。かつての日本の武士は、勅令によって刀を奪われたとき、非常な不安を感じた。しかし一度この攻撃と防衛の武器を奪われてみると、かえって以前よりも安全を感じたものである。

ああ、わたしの愛する祖国は、その若い未経験な明治時代の政治家の指導のもとで、この、文明とはいえない西洋文明を、そっくりそのまま受け容れてしまったのだ！日本が最初にヨーロッパから学んだものが陸軍と海軍であったということは、まことに歎かわしいことである。なるほど日本は西洋式な戦闘方法の採用によって、一世紀もたたないうちに世界の列強に伍する地歩を占めた。だが、失ったものは何であったか。四十年前、日本は世界で最も愛される国であった。全世界が日本の国民に門戸を開いており、日本人はどこでも歓迎された。しかし今は、なんという違いだろう！三回たてつづけの戦勝によって、日本は台湾と朝鮮と南洋群島を得た。しかし、それとともに全世界の愛を失った。いまや全世界は日本に向かって閉じ、日本の国民はいたるところで恐れられ嫌われている。今こそ、日本は眠りから醒めるべきときで

ある。膨大な軍事予算をとまなうこの西洋文明は、完全に放棄されなければならない。日本は新しい文明を、真に文明であるところの文明を始めなければならない。それは戦争のない文明であり、デンマークの規模を大きくしたもので、陸海軍は警察程度にして、世界の善意にもとづく帝国、安全で勤勉で平和的な国民となり、二十六世紀前、神の預言者によって宣べられた神の政策によって、「キリスト教的」欧米の指導者となるような文明である。

それでは、これらのいわゆる「キリスト教国」がこの明白にキリスト教的な政策を採用するまでは待つ必要があるだろうか。何度軍縮会議を重ねても、所期の軍縮を実現することはできないであろう。このことは、誰かが「血肉と謀ることなく」（ガラテヤ書一章一六節）実行しなければならぬ。わが日本が国家的宣言を發して、五十年前武士の武装解除をしたように国家の武装解除を宣言し、こうして全世界に新文明を招来しうるなら、それはなんとすばらしい日であろう。

これは、内村の死から七十年の現在の日本に向けられた何という適中した預言、適切な警告であることでしょうか。日露戦争で実は日本は負けたのに、勝った勝ったと喜んだ、

その錯覚がその後の日本を躓かせた、とはこ
んにち多くの歴史家が指摘するところですし、
ここにはまた、こんにち心ある識者が提唱す
る「小国主義」や「良心的軍備拒否国家」の
理念も論じられています。私どもは内村の歴
史的洞察の確かなことに驚かざるを得ません。
日本は彼の死の直後に十五年戦争に突入し
ました。彼の非戦論を継承した名誉ある例外
が無いではありませんでしたが、日本人の大
勢はこの「新文明」論に動かされることはな
く、悲惨で愚かな戦争を戦い、大敗しました。
「五十年前」の敗戦は日本に、大いなる摂理
の強制ではありませんが、ひとたびは「国家
の武装解除を宣言」させました。内村の願い
は実現したのです。そして、日本人は歓呼し
て「平和憲法」を迎え、これに生きてきたお
かげで、近代日本としては稀有の半世紀にお
たる平和を享受してきました。しかし一方で
は、私どもは憲法の「戦力不保持」の条項に
反して自衛隊と称する軍隊を創設し、これの
保持に今や五兆円に上る「防衛費」を計上し
て日米軍事同盟を強化し、テロ事件後は特別
措置法を制定して事実上戦争に参加している
というのが現状です。かくして「第九条」は
空洞化から、今や全くの死文と化してしまっ
たと言っても過言ではありません。さらに憂
慮すべきことは、政府の強行するこの解釈改

憲による違憲事態に対して、主権者たる国民
が最早疑念も懸念も抱いていないかに見える
ことです。

過日東京で行われた「矢内原忠雄記念講演
会」で溝口正先生が、新憲法が公布された当
時（四六年一月）矢内原が既に次のような
預言的言辞を残されていた事実をご教示下さ
いました。「新憲法の発布に際して私の最も
遺憾としたことは、昨年八月以来、本年十一
月の新憲法発布に至る間に、一度も国民的悔
改めの行われなかった事実である。…皇室
も政府も国民も国家的に罪の悔改めを公にす
ることなくして発布した新憲法は、その基礎
脆弱である。それ故に私は預言者イザヤと共
に泣き悲しみ、衆と共に新憲法発布祝賀の催
しに参加する気になれなかつたのである。」
戦後五十有余年の日本の最大問題が実に適
確に剔抉されているではありませんか。それ
は侵略戦争に対する罪責感の欠落、世界有数
の常備軍を有しながら「平和憲法」があるか
ら日本は平和国家であるとする共同幻想、そ
してこの欺瞞と傲りに起因するあらゆる面
の無責任と倫理感・道徳心の鈍磨、内村の言
う「真の宗教」の欠如などでありましょ
う。

相対的視座に立つ時、勿論のこと、文明も
また絶対視されることは許されません。その

意味で、宗教的熱狂主義とともに、宗教的平
和主義もまたよく謙虚でなければなりません。
内村は申します。

戦争は神の全能の実現によってやむのであ
る。戦争廃止は神がご自身の御手に保留した
まう事業である。世界の平和はひつきようす
るにキリストの再臨を待つて初めて世に行わ
るのである。

平和は人の平和主義によってではなく、神
の全能によって必ず実現する。この信仰のゆ
えに、人の思いを超える「神の平和」を賜わ
った私どもは、その破格の恵みに感謝して、
「真の平和主義者」であられるイエスになら
い「平和をつくり出す者」（平和主義者）と
なる。そして、内村の言葉によれば、「平和
運動の最も確実なる手段として、福音宣伝に
従事する」のであります。これが私どもの平
和主義であり、その上に築かれる戦争のない
「新文明」であります。そうであれば、それ
がどんなに遠い道程であろうとも、私どもの
歩みは内村のあの念願に應えるものでありた
いと願います。

今こそ日本は眠りから醒めるべきときであ
る。わが日本が国家的宣言を發して国家の武

装解除を宣言し、こうして全世界に新文明を招来しうるなら、それはなんとすばらしい日であろう。

むすび

結論と言うべきものは何もありませんが、最後に、ちょうど「昭和」が始まった年のクリスマスに内村が書いた「朝が来る」(二六・一二)という文章を引くことにします。

晩年の内村が、正に偉人は偉人を知ると言うべき親交を結んだ人物にアルベルト・シュヴァイツァーがいました。『インテリジェンス』誌には、内村がそのランバレネにおける医療事業の為に送った寄付金に対するシュヴァイツァーの感謝状が、内村の付言とともに掲載されています。ちょうどその頃、シュヴァイツァーの言った言葉にこういうのがあります。「わたしの認識は悲観的であるが、意欲と希望とは楽観的である。」内村もまた自らを「ひとりの度し難き楽観主義者である」(「楽観主義者の告白」二六・三)と告白したのですが、その楽観主義の根拠を述べたものがこの「朝が来る」という一篇であると行ってよいと思います。これの一部を読んで私の話を終りたいと存じます。

セイルからわたしに呼ばれる者がある。

「夜回りよ、今は夜のなんどきですか」。

夜回りは言う。「朝がきます、夜もまたきます」。夜である、この夜は続くらしい、いつまで続くか分からない、際限なく続くようにみえる。

われわれは夜のなかにいる。このいわゆる文明は闇であつて光ではない。このデモクラシーは錯覚であり、人々を偽りの自由へ誘う狐火である。このキリスト教は聖なる衣を着て歩きまわる幽霊である。この社会改良は社会破壊であつて悪をさらに悪化させる。この幸福の増進は邪悪の増進であり全地を本当の地獄にしてしまう。この平和運動は戦争づくりにであり、戦時には戦争をとない平和のときにだけ平和をとなえる無為無能な聖徒聖女の道楽である。

しかし朝は来る、かならず来る、天地の立つがごとく確実に来るだろう。

それでは、いかにして朝は来るのだろうか。神が「光あれ」と言いたもうた初めの日に光のぞんだように朝は来るであろう。待望の朝は夜のなかからは来ないであろう。夜は決して朝を進化させないであろう。朝は光と同じく、神の命令と神の力によつて来るであろう。それは神の創造であり、人間のもたらすものではない。

朝が来るのは、太陽、すなわち義の太陽がのぼるからである。その義の太陽とは「東」の子なる神の子にほかならない。最も輝しく美わしい東の子イエス、十字架につけられ、死して葬られ、三日目に甦えり、いまや全能の父の右手に座したもうイエスが、ふたたび来たりたもうそのとき、朝はこの暗黒の地に来るであろう。そして夜はもうないであろう。それこそ真の朝であり、鳥は歌い、朝露の玉は輝き、すべての涙は拭い去られるであろう。「ものとして、その暖まりをこうむらないものはない」。聖なる怒りのもえる彼の御顔から発する熱は、政治・外交・商業・教会のあらゆる分野から一切の刈株を焼きつくすだろう。そのとき全地は清められ、「聖徒が国を受け」るであろう(ダニエル書七章一八節)。彼は来たりつつある。朝はあけつつある。朝とともに喜びは来る。おお、喜び、喜び!

(所載) 「森の宮通信」

第352号(二〇〇二年八月)

第353号(九月)

森の宮通信社 四条畷市